

東日本大震災における 全国大学生協連

「学生ボランティア」の取り組み



2011年3月11日に起きた東日本大震災から5年が経ちます。これまで多くの人が、被害にあわれた方々のために何かできることはないかと様々な形で行動されたと思いますが、震災直後、多くのボランティアが被災地に向かい活動しました。

全国大学生協連組合連合会（全国大学生協連）では、震災直後から5年間「学生ボランティア」活動に取り組んできました。今号では、これまでの「学生ボランティア」の取り組みについて取材しました。

〈文責・編集部〉

～ 全国大学生協連の概要 ～

■会員大学生協の数 220 (2015年12月末現在)

■組合員数 1,541,514人 (2015年9月30日現在)

■概要

1947年に発足した全国学校協同組合連合会（全学協）を前身として、1958年に全国大学生協連組合連合会（全国大学生協連）が設立されました。

大学生および教職員向けの購買事業や食堂事業などを行うほか、入学から卒業までのキャリア形成支援や就職活動支援、東日本大震災復興支援や環境活動など社会的活動に取り組む学生のサポートを行っています。

■共済事業について

全国大学生協連共済事業部門が、1981年に学生総合共済（大学生向けの「生命共済」「火災共済」）を開始しました。

生協法改正を受けた共済事業分離のため、2010年に全国大学生協共済生活協同組合連合会（大学生協共済連）が発足しました。東日本大震災では、地震・津波による学生本人のケガや死亡および父母の方の死亡に対して計128件、約9,730万円の共済金を給付しました。

はじめに

全国大学生協連「学生ボランティア」（大学生協ボランティア）は、東日本大震災直後の2011年4月から2015年9月まで、45チームにわたり、延べ1,157名の学生が、宮城県七ヶ浜町を中心に活動しました。

震災直後、何の資格も専門性もないけれども何か役に立ちたいとボランティアに参加した学生たち。時と共に変わっていく被災地ニーズと学生たちの意識。活動の記録をみると、学生たちは求められた活動の中から次のニーズを把握し、自分たちなりに考え工夫しながらボランティアを実践していました。その活動の軌跡からは、「被災された方々の役に立ちたい活動」にも関わらず、学生たち自身もボランティアを通して成長していく姿が伺えました。

1. 学生の声を反映させる仕組み

大学生協の組合員の多くは18～22歳の学生で、理事の約半数も学生が務めています。ほぼ4年という短期間で組合員が入れ替わりになります。そのため学生組合員が参加しやすくなる仕組みとして、学生委員会やアドバイザー制度があり、組合員の声を生かす生協運営に重要な役割を果たしています。また、「ひとことカード」という組合員の要望や意見を活動に生かす取り組みもしています。

2. ボランティアセンター立ち上げ

2011年3月11日14時46分、東京の大学生協会館も大きな揺れを経験した全国大学生協連では16時には震災対策本部を立ち上げました。多くの大学生協では、新入生の受入準備イベント等が行われている時期であり、被災地の状況、学生や会員生協役職員の安否の確認、支援物資提供や義援金等の被災者支援策を検討しました。

刻々と報道される東北の被害状況をみて、これほどの被害に自分たちも何かしなくては、現地でのボランティア支援もできないかと事務局も学生理事も思ったと言いますし、学生たちからも何かできないのかとの声が学生委員を通じてすぐに寄せられました。

被災地域にある大学生協は、学生の安否確認や事業継続に向けてたいへんな状況でしたので、3月16日、阪神・淡路大震災のボランティア経験者を含む先遣隊が宮城県仙台市の現地対策会議に合流しました。まず、津波被害を受けた沿岸部に倉庫がある取引先の状況を確認し、17日以降ボランティア活動が展開できるかを確認するため、仙台市などのボランティアセンターを回り、被災状況とボランティアニーズの聞き取りを行いました。宮城県災害ボランティアセンターからは「さまざまなNPOなどと協働しながら全県で取り組みを進めたい。ぜひ協力を」との呼びかけがされたそうです。

「余震があるなか、学生ボランティアは時期尚早」という意見もありましたが、4月3日には東北地域の学生委員・職員計12名が多賀城市

ボランティアセンターで活動を行い、その経験を踏まえ、4月5日、東京の全国大学生協連本部に「大学生協ボランティアセンター」を立ち上げ、参加者を全国の大学に募りました。

3. 2011年4月18日から5月8日まで —初動期ボランティア活動—

(1) 参加者募集

1タームを4泊5日とするボランティア活動として、4月8日から参加者を募集したところ、生協のない大学も含め、北海道から九州まで全国各地の49大学から約100名の応募が殺到し、一部途中で募集中止とするほどでした。

第1タームは4月18日から始まり、第5ターム終了の5月8日まで、延べ234名が継続的に活動しました。この時期は、すぐにでも何か役に立ちたいという多くの学生の意思を汲み、参加しやすくするため参加費は徴収せず、「ボランティア活動積立金」から拠出しました。

～初動期ボランティア4泊5日の流れ～

1日目 移動日 16時集合 オリエンテーション
2～5日目 朝ミーティング→移動→ボランティア活動（9～15時）→移動→ミーティング（5日目最終日も15時までのボランティア活動後、「修了式」を行い帰宅）

(2) 活動場所と活動内容

大学生協ボランティアが活動したのは、宮城県七ヶ浜町と宮城県東松島市の二か所でした。

① 七ヶ浜町

仙台市北東に隣接する人口約2万人、約6千

全国大学生協連のボランティア活動

1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災では、全国大学生協連として「ボランティアセンター」を初めて設け、約1,200名の学生が避難所支援等の活動を行いました。また下宿が倒壊した学生たちのために建設した224室の寮のうち、芦屋の58棟は徳島県の林業関係者より、間伐材のミニハウスが寄贈されました。

この林業関係者の方々とは、その後も学生を含めた交流が続き、他地域の団体や有志と共に、1998年、JUON（樹恩）ネットワークを設立し、都市と農山村の交流や森林を守る活動を進める環境NPOとして活動してきました。このJUONネットワークは、東日本大震災での大学生協ボランティアセンターにおいても、当初より学生たちのコーディネーター役を果たし、その後の全タームの活動を支えることで、阪神・淡路大震災の経験や成果が東北支援に着実に引き継がれていきました。

そのほかにも、会員団体ごとに、地域のニーズに合わせて、敬老訪問や清掃活動などを行っています。

世帯を抱える七ヶ浜町では、最初10か所あった避難所が4月18日には3か所に集約され、計1,000人の方が避難所で暮らしていました。

津波の被害は町面積の4分の1もあり、全壊家屋約600戸、半壊約200戸、床上・床下浸水が約100という甚大な被害が出ていました。

ボランティアニーズは「泥かき」が筆頭で、地元の中・高校生ボランティアから引き継ぎを受け、家屋の泥だし・掃除、通学路や海岸の清掃、瓦礫撤去等を行いました。

また、「中央公民館」と「七ヶ浜国際村」の避難所で、仮設トイレ清掃、避難所内や周囲のゴミ回収、トイレの水汲みなどを行うほか、避難所の子どもたちの遊び相手になったり、子ども用の本棚を作って子どもたちが読みたくなるような工夫をしたり、仮設トイレのトイレトーパー入れを作って快適に過ごせるような工夫をしたそうです。

また、避難所のWEBページを作成し、全国から大勢のボランティアが集まっていた七ヶ浜町災害ボランティアセンターでのボランティアの仕訳情報を発信したり、被災者のための掲示板機能の役割を果たしたりしたそうです。

② 東松島市

石巻市南西に隣接する人口約4.3万人の東松島市は、南岸が太平洋に面し、石巻湾、仙台湾の一部を形成し、海岸から平地が続いているため津波の被害を大きく受けており、七ヶ浜町と同様に泥かき等が主な活動となりました。



泥かき作業の様子

5～6人が1グループになって、指定された家屋や道路、側溝の泥だし・掃除、通学路や海岸の清掃を行いました。泥だし作業だけでなく、家の方との会話から、困っていることが多くあることを知り、学生たちが改めて自分たちに何ができるかを考えるきっかけにもなったそうです。

(3) 初動期の活動を通して見えてきたこと

現地の災害ボランティアセンターから、「大学生は柔軟かつ自主的に行動できる存在」と言われ、震災から約1カ月後に始まったボランティア活動が、被災地の復旧初期を支える力とされたことを実感することができたそうです。

大学生協ボランティアでは各チーム初日のオリエンテーションにおいて、前チームからの引き継ぎを行うことで、避難所支援を継続的に行うことができました。

また、毎日朝、夕2回のミーティングを行うことにより、単にボランティア活動を行うだけでなく、参加者が活動を通して感じたこと、考えたことをメンバー内で共有し、できなかったこと、つらかったことなど心の痛みを共有することで、次の行動へつなげることができました。

一方で、ボランティアニーズを把握し、実践するまでには時間と人員が必要なことがわかり、普段から、災害ボランティアセンターの運営主体である社会福祉協議会や他のNPO、ボランティア団体との関係作りや、市町村自治体との関係作りが重要な課題であると認識したという報告もされています。

また、JUONネットワーク（前頁参照）のボランティア活動のノウハウを活用しながら進めることができましたが、あらためて大学生協として災害時はもちろん、通常のボランティア活動への取り組みや情報提供の仕組みづくりを行う必要があることを実感したと言います。

参加学生からは、「七ヶ浜町の復興とは、七ヶ浜に住む方一人一人の『心の復興』だと思います。心の問題だからこそ僕たち大学生にもできることがある」との感想も寄せられています。

4. 2011年5月中旬以降

－週末および長期休暇の活動－

2011年5月には、学生生活との両立を考慮した行程として、週末の土日に夜行バスを利用した1泊4日(車中3泊)の「週末ボランティア」の形で参加者を募集したところ、各チーム定員30名を毎回上回る応募があり、第6～10チームで述べ166名が参加しました。この時期以降、今後の長期的活動を展望し、また参加者に自主性を持ってもらうため参加費を徴収しています。

2011年8月以降は、夏休み等の大学休業期間中の活動へとシフトし、交通費を一部支援する大学もあり、西日本方面からも多くの学生の参加がありました。

震災から半年経つと、瓦礫撤去等の体力仕事以外にもボランティアセンターの運営側としてデータ管理等を任されるようになった学生たちは、より自発的に行動するようになり、学習支援やパソコン作業など、自分たちの得意分野で、学生ボランティアの役割を發揮できる取り組みを模索するようになりました。

(1) 学習支援

学生自らが持ち込み企画として行った学習支援は、自分たちで作成したポスターやビラを配り歩くことから始めました。

中・高校生には、テスト対策や受験対策などそれぞれが持ってきたものをサポートしましたが、小学生には、学習面の支援だけでなく、一緒に折り紙を折ったり、外で遊んだりもしました。

(2) ニーズ調査

2012年3月の活動では、今まで七ヶ浜町災害ボランティアセンターにニーズを寄せたお宅に再度訪問し、今必要なことやこれからの復興に関する聞き取りを行い、分析をボランティアセンターと協力して行いました。

七ヶ浜は、水田の冠水率が東北で一番高かったため、水田の瓦礫撤去を優先的に行ってきま

したが、他のニーズを聞き取ることで、現地の人の想いに寄り添うことの大切さを感じることができたそうです。

5. 震災から1年

2012年3月10日、七ヶ浜に全国各地から300人を超えるボランティアが集い、現地の方との交流を図る「ボランティア座談会」、翌11日には、東北大学で「市民とボランティアの集い」が開催され、大学生協ボランティアは準備段階から参加しました。

座談会では、仮設住宅の方々と在宅被災者との支援度合いの違いや、情報伝達が行き届かず「人と人をつなぐ」ことが難しいなど、多くの課題点が挙がっていました。

震災から1年を節目にしたこれらのイベントに参加した学生は、現地で継続的に復興活動する人の数が減っている中、被災地を実際に見ること、そのことを多くの人に伝えることを大切にし、長期的支援を行っていく必要性を感じたと言います。

6. 2年目以降～2015年までの取り組み

(1) 七ヶ浜学習支援の継続

まだまだ「何か役立つことがしたい」という学生の気持ちは続き、定員30名を超える応募がある回もありました。特に、塾講師や家庭教師等の経験を活かした学習支援を行いたいという学生は多く、現地の方々からも支援の継続要望が高いことから、毎月1～2回のペースで継続してきました。

2013年度から七ヶ浜学習支援ボランティアに事務局として参加した学生はつぎのように語っています。

「学習支援ボランティアは、勉強を教える学習力向上を図ることが主目的ではありません。子どもたちにとって心のよりどころになる、『心のケア』が必要です。震災当時から子どもたち



七ヶ浜学習支援の様子

の震災による学力低下や精神不安による不登校、引きこもりになる子どもが増えています。ボランティアの時は、子どもたちとのコミュニケーションを大切にしながら一緒に楽しむことを心がけています」

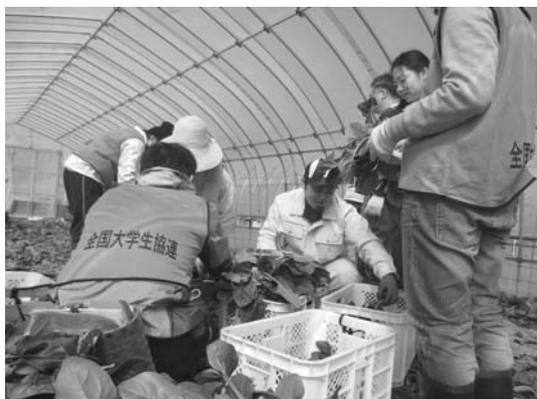
(2) 集会所サロン活動

仮設住宅に設置されている集会所に集まる方々とお話をしながら交流するという「集会所サロン活動」も、継続して取り組んできました。

(3) 農地再生作業と農業体験

2014年3月からは、宮城県名取市美田園地区において、津波で畑に流れ込んだ漂流物を取り除く「農地再生作業」に取り組みました。

2015年3月にも継続して参加した学生は、「昨年は石を一つ一つ拾っていた土地に、今ではハウレンソウが育っている。現地は着実に復興に向けて前進していると感じた」と語りました。



農業体験の様子

(4) 「知り、知らせ、考え、話し合う」

2年目以降は、ボランティア活動の他に七ヶ浜町以外の被災地を見る行程も組み入れられ、宮城県名取市で壊滅的な津波被害を受けた^{ゆりあげ}閑上地区にも行きました。14名の生徒が津波で命を失った閑上中学校跡地に震災を語り継ぐために建てられた「閑上の記憶」という施設では、当時の映像を見て、地元の方の話を聞きました。

現地の方が「自分の目で見て、周りの人に広めてほしい。風化させないために」とおっしゃっておられ、「自分の目で見る機会」を提供し続ける重要性を感じたそうです。

参加した学生たちは、まず自分の身近な家族や友人たちに自分の目を見たことを伝え、ボランティアサークルで報告会を開催したり、大学生協の店舗にボランティアへの参加を呼び掛けるポスターを貼るなど、それぞれの身近なところから被災地の状況を伝えていきました。

(5) 未来の大学生応援募金

大学生協・東北ブロックでは、①岩手県、宮城県、福島県の被災影響の大きい高校に「義援金」を送る、②被災地での「学習支援ボランティア」運営費用に充てることを目的に、2012年より全国の大学生協などを通じて



「未来の大学生応援募金」の取り組みを行っています。この募金には、全国の大学生協組合員や取引先から、2016年1月までに約1,473万円の募金が寄せられ、その中で被災高校に義援金として、2012～2013年には1,075万円、2015年には300万円、総額1,375万円が73校に贈呈されました。今後も贈呈の予定があるとのこと。

(6) 東北地区大学生協職員の手記

大学生協連・東北事業連合では、震災当時の大学生協関係者の体験を手記として残し、「震災を忘れない、震災の記録を残す」ために、「東北

地区大学生協職員の手記「東日本大震災—そのとき、その後、これから—」を、2013年3月11日にHPに公開し、12月に冊子化しました。



7. 今後に向けて

大学生協連では、これまでの経験を踏まえ、『東北の復興に何かしたい組合員』とともに、今後も活動を続けていくことを検討しています。

2016年3月11日には七ヶ浜町で行われる震災関連イベントの支援活動を行う予定とのことですが、4年半にわたり学生ボランティアを受け入れてくれた七ヶ浜町ボランティアセンターの閉鎖に伴い、これまでの活動はいったん区切ることになりました。

今後は、『平和と社会的課題委員会』において『震災復興タスク』として、現地支援に加え、大学や地域と協力して復興支援に取り組めるような関係作りや、参加する組合員も気づきや成長ができるような活動を提案していく、とのことでした。

おわりに

—取材を通じて—

震災の年に大学に入学し、2015年から大学生協ボランティアに事務局として関わった副学生委員長荒木翔太氏は、「学生たちがボランティアに参加する動機も、そして活動を通して感じることもさまざまでした。最近では社会人になる前に視野を広げようと参加する学生もいました。が、現地で活動する中で苦しんでいる被災された人たちをみて、自分たちの活動が本当に役に立っているのか自問自答しながら活動し、参加者同士で激論を交わしたこともあったようです」と語っていました。

事務局の立場で支援していた、会員支援部の

石井愛氏は、ボランティアに参加した学生の初日と最終日の様子との格段の違いに驚いたと言います。

「ニーズ調査の方法について、直接面と向かって困っていることはありますかと聞いても遠慮されてしまうが、近所で困っている方はいませんかと間接的に聞くことでニーズがつぎつぎに出てくるという経験をした学生が、つぎのチームの学生にそのノウハウを伝えている様子は頼もしく、たった3日間でものすごい成長を遂げて帰っていく姿を見ました。また、無口な学生が、現地を見たことで堤防を高くしていることの是非について同世代の仲間たちと議論するようになっていました。それまで自分を中心に考えていた学生が、社会との関わりを考えるようになる、この変化には目を見張るものがあります。

さらに、この学生ボランティアの経験を生かして、他のNPOでボランティアを続けている学生や、2015年の鬼怒川堤防決壊被災地に自分たちでボランティアとして駆けつけた学生もいます。この活動を通して、被災地の役に立つだけでなく、社会への関わり方を学ぶことができ、学生たちは成長することができたのだと思います。」

経験もお金もない学生が被災地で役に立ちたいという思いを大学生協連がコーディネートすることで、被災地に実際に役立てることができているこの活動は、協同組合理念を具現化したものと思いました。また、SNSなどで瞬時に情報共有できる時代であっても、実際に見聞きすることは何物にも代えがたい経験であることは今も昔も変わらないことも再認識しました。

最後になりましたが、新入生対応準備で忙しい時期に取材にご協力くださった全国大学生協連企画室長眞田隆裕氏、会員支援部石井愛氏、副学生委員長荒木翔太氏にあらためて感謝申し上げます。